

桑中喜語

永井荷風

青空文庫

なにがしと呼ぶ婦人雑誌の編輯へんしゅうにん人しばしばわが廬ろに訪とひ来りて通俗なる小説を書き
 てたまはれと請こふこと頻しきりなり。そもそも通俗の語たるやその意解しやすきが如くにしてま
 た解しがたし。僕一人の観て以て通俗となすもの世人果して然りとせずや否やいまだ知る
 べからざるなり。通俗の意はけだし世と共に變あずべきものなるべし。川柳せんりゅう都々逸どどいつは江
 戸時代にあつては通俗の文学なりき。しかして今日は然らず。今日もしつぶさに『未摘すえつむ
 花』はなのいふ処を解釈し得ば容易に文学博士の学位を得べし。むかし女郎の無心手紙には
 候かしくの末に都々一なぞ書き添そるもの多かりしが、今日大正の手紙には童謡とやら短歌
 とやら書きつけて性の悶もたえを告ぐとか聞けり。されば今日の男女に喜ばるべき通俗小説をも
 のせんとせば、筆とを乗のるに先んじてまづ今日の下情かじょうに通曉せざるべからざるなり。下情
 に通曉せんにはその眼光水戸黄門の如くなるにあらざれば、その経歴とわやまさえものじょう遠山左衛門尉とよやまざゑもんじょう
 比すべきものなくんばあるべからず。ここにおいてや通俗小説の述作あに豈あにそれ容易の業わざなら
 んや。人おのおの好むところあり。下戸げこあり。上戸じょうごあり。上戸の中更うちちに泣くものあり笑

ふものあり怒るものあり。然れども下戸上戸おしなべて好むところのものまたなきにあら
ず。淫事すなわち即これなり。当今の人これと呼んで性の要求となす。なほ車夫の四辻を十字街と
いひ芸妓の手踊を舞踊とよぶが如し。当世人の言語一として新聞記者の口吻こうふんに似ざるは
なし。厭いとふべきなり。

通俗の本旨既に色欲淫事すなわちにあり。然りとすれば一たび筆を通俗の小説に乘とらんとするも
の、淫事を他にしてまた何をか描かんや。『源氏物語』は我國淫本の権輿けんよなり。泰西に
ボツカーズの『浮世双紙』、ナワール女王の『懺悔録』等あり。漢土に『飛燕外伝』、
『雑事秘』の類あり。近世に至つて『紅樓夢』『金瓶梅』の如き、皆読む者をしてアヂな
氣を起さしむ。

淫書の見解また時によりて変ず。古人の眉まゆを顰ひそめて淫書となせしもの、今人見て必し
も然りとなさざるものあり。今人の世に害ありとなすもの、将来において果して然るや否
や知るべきにあらず。宮古路みやこじの浄瑠璃は享保きやうほ元文げんぶんの世にあつては君子これを聴いて桑そ
間うかん濼ぼくじよう上の音となしたりといへども、大正の通人は頤あごを撫なでて古雅掬きやくすべしとなす。け
だし時世変遷の然らしむるところなり。大正癸亥きがいの年の夏、女記者お何といふものあり。
夫の目を忍びて小説家某と密通し、事の露あらわれんとするや姦婦姦夫ととも俱に為すとことを知らず、

人跡断えたる山中の一ツ家に隠れ、荒淫幾日、遂に相抱いて縊死す。日を経て悪臭数里に漂ひ人の初てこれを知るや、死屍既に腐爛して性の陰陽を弁せず、眼球頭髮俱に脱落して蛹雲集せしといふ。当世の才子佳人これを伝唱して以て絶代の佳話となす。そのいふ所を聞くに、道德を超越して能く本能を満足せしめたるが故なりと。狂言作者 古河黙阿弥のかつてその戯曲『鵜飼の篝火』をつくるや狼の羣をして山中の辻堂に潜める淫婦の肉を喰つて死に致さしむ。その意は勸善懲惡にありしなり。これに由つてこれを觀れば、道德審美の觀念時と共に浮動することあたかも年々時様の相異なるに似たりといふべし。

ああ、大正の世人既に姦淫双斃の事を説いて以て盛世の佳話となす。この時に當つて僕独耳を掩うて鄙語聴くに堪へずとなすが如きは甚通俗の本旨に戻るものなり。いやしくも筆を通俗小説に乗らんとするもの為すべき所にあらざるや論を俟たず。僕今芸者の長襦袢を購はんがために、わが生涯の醜事を叙し出して通俗小説に代へ以て売文の賈を貪らんとす。老羸なほかくの如くにして聊時運に追隨することを得たりとせんか、幸何ぞよくこれに若くものあらんや。

僕年甫めて十八、家婢に戯る。『柳樽』に曰く「若旦那夜は挿んで昼叱り。」とけだし実景なり。翌年独芳原の小格子に遊び、三年を出でざるに、東廓南品、甲駅、板橋、

凡そ府内の岡場所おかばしよにして知らざる処なきに至る。二十四歳海外に渡航するや五大洲各国の娘子軍じようしくんと※を交まじへ皆拔羣ばつくんの功あり。然しかれどもなほ安やすんぜず、窃ひそかに歎なげじて曰く宮本武蔵は※々《ひひ》を退治せり。洋人の色に飢るや綿羊を犯すものあり。僕いま未能まなくここに到るを得ずと。年三十にして家に帰るや、爾来じらいここに十有余年、追歎索笑虚日あるなし。妓ぎの家いに納いる事数次。自ら旗亭を営むこと両度。細君を追出してまた迎る事前後三人。今年、馬齒蚤はやくも桑年そうねんに垂なんんとして初めておくびの出るを覚えたり。『操草紙みさおぞうし』といへる書に曰く「まことに色の世の中なればとかく戯れ遊ぶべし。人間わづか五十年といへど四十年からはばつとも遊びにくし。その内も十七、八までは何の心もなく世をくらせば差引残り二十二年ほどなり。それさへ半分は寝て過せばわづか十一年なり。それも悉く通ひ詰にする人あらんやうもなければ、よく遊んでからが、高が五十年の中にまる十年とは遊ばれぬ人間世と知るべし。」と。ああ、僕夜半夢覚めてつらつら四十余年の生涯を顧るに、身蒲ほ柳りゆうの質にしてしかも能く人一倍遊びたりと思へば、平生おのづから天命をまつ心ありしが故にや、ことしの秋の大地震にも無辜むこの韓人を殺して見んなぞとの悪念を起さず。火事場の稼いぎにもゴムの鎧よろいに身を固むることを忘れざれば天狗てんぐの鼻はな柱ばしら遂に落るの憂なく、老眼今なほ燈下に毛蟲けじらみを捫ひねつて当世の事を談ずるの気概あり。家にはたびたび狐狸妖怪

棲み家をなせしといへども、幸にして産を破るに至ぎりしは何たる果報ぞと、今になりては妖婦の魔力よりも僕が身の安泰かへつて不思議とやいふべき。

二

卯の年に生れて九星四緑に当るものは浮氣にて飽きやすき性なりといへり。癡性の飽性ともいへり。僕はそもそもこの年この星の男なり。さるが故にや半年と長つづきした女はなし。大抵は三月目位にて、庭の花にはあらねど時候の変目が色のかはり目とはなるなりけり。然れどもこれは後より言ふはなしにて始より一季半季ときまりをつけて掛るわけではさらさらなし。初手は随分この女ならば末の末までもと、のぼせ上るが常なるを、さうと見て取るや否や、この男殺すも活すも勝手次第と我儘の仕放題しはじめは女なり。男の目に女子が天性の欠点ありありと見えすいて来るは正にこの時ぞかし。初は噓一ツも男の見る前には遠慮せしを、髪かたち身じまひは勿論なり。一ツ寝の床に寐相をかまはず寐言齒ぎしりに愛想をつかさるとは知らで、たまたま小言の一も言はるれば、一瞬に薄情とわるく気を廻して、これよりいよいよ何かにつけて悋氣の角を現す。悋

気は女の慎しむべきところ。女にして愷氣を慎しまば、その他の欠点は男大抵はこれを許しこれを忍ぶべし。愷氣をつつしむ愚婦の徳は廻氣まわりぎはげしき才女にまさること万々ばんばんなり。つらつら女子が愷氣のありさまを思ひ見るに、その境遇性質体格によりて一様ならず、女子の愷氣はなほ男子の鬱憤に同じきものなれば、その行に発する所おのづからその為ひことなり。人なりを現すものなり。顛こめかみ顛に即功紙張りて茶碗酒引かける流儀は小唄こうたの一ツも知らねば出来ぬことなるべく、藁人形わらにんぎょうに釘打つ丑うしの時参とまひりは白無垢しろむくの衣裳に三枚齒あしだの足駄あしだなんぞ物費ものいりを惜しまぬ心掛おおじだいすでに大時代なり。格子先に男の胸倉取つて泣きわめくは古今通例の下世話にして罪はなし。羽織の紐より帯ネキタイなんぞの結目に氣をつけ、甚しきはずぐと男の懷中へ手を入れ移うつり香がをためすが如きに至つては浅間しくもまたいやらしき限りなり。事あるごとにおのれが衣類髪たんすのものを箆たんすにしまひ鍵をかけて切口上に離縁申出す女房あり。また何かといふとすぐに駈け出して親類友達の家なぞへ行つて泊る女房あり。いづれも三日打捨てて置けば必ず向より詫かもしを入れて還ること、あたかももう来ねへぞといふお客かならず必かならずその晩に来るが如し。夜中に鴨居かもしへ細帯を引掛け、あるいは井戸端いしほたをうろついて見せる女、いづれも人の来つて留めるを待つこと、これまた袂を振つて帰る帰るとわめく甚助親爺じんすけおやじと同様なり。人知れず硫酸モルヒネ猫ねこいらす不入いらすなんぞ飲むものなきにしもあ

らねど、こは畜ただに痴情のなす所のみにあらず、男に入揚いれあげ貢みつぎし後ぼんと捨てられなぞし
 たる揚句あげくの果にして、色情のほかに金錢のいぎこぎ大おおにあるものと知るべし。女の財宝に
 心ひかるること哀れにもまたおそろし。然るが故に、新聞雑誌の議論にかぶれたる新しき
 女の、ともすれば貞操 蹂躪じゆうりんの訴訟に金錢を獲えんとしてかへつて弁護士の喰物となるも、
 色よりは慾のあやまちなり。尤もつともこの手合てあいの女、大抵悪摺わるずれしたる田舎出のものにあらざれ
 ば市中小商人こあきんどの娘にして江戸ツ児にはなき事なり。僕先年三田慶応義塾に勤めし頃めと娶り
 しもの、湯嶋聖堂の裏手に相応の店を張りし商家の娘なりしが、離縁のはなしに親元より
 五百円ほしき由よし申出でたれば持たせつかはしたる事あり。東京の女にもかかる例あれば参
 考のため記しるし置くなり。その後売女の手切金てぎれきんにつきてはまた別に記すべし。世には売女
 とさへいへば貪欲甚しきやうに思ふものありといへども、いぎ手切金のだんになりて話さ
 へわかれば案外さつぱりとしたものにて、わづかばかりの目腐れ金めくさに人がの足を運ばせるは
 かへつて素人しろうとに多し。一口物ひとくちものに頬を焼くといふ古人の金言思ふべきなり。

女子の恪氣りんぎはなほ恕ゆるすべし。男子が嫉妬しつとこそ哀れにも浅間あさましき限りなれ。そもそも嫉妬は私欲の迷にして羨せん怨えんの心憤怒ふんぬと化して復讐の悪意を醸かもす。野暮やぼの骨こつちよう頂ちようなり。血氣の少年はさて置き分別ふんべつざかり盛さかの男が刃物はものざんまい三昧無理心中なぞに至つては思案の外ほかにして沙汰のかぎりなり。およそ森羅万象一つとして常住なるはなし。時に昼夜あり節に寒暖あるは自然の変化なり。変化に先立ちてこれが備そなえをなさざれば遣やりくりしんしやう繰繰身しんしやう上しやういかでか質の流を止めんや。夜ごと枕並ぶるおのれが女の心に気もつかで、飽かれて後に怨うらみ、怨うらみみて後に怒るは愚にあらずや。怨いぎしおみ憤いぎしおるに先立ちて先見の明なかりしおのれが構とうまい昧はを愧はづべきに、未練に未練を重ねて離行く女の後を追ひ、是が非にも己おのが実意の底を見せて改心させんと片意地になるが如きは以ての外ふりやうけんの不量見なり。そもそも男女の恋仲、仁義道徳を説いて然る後に出来合ふものにあらず、初手の馴れ染めは唯ふとした気のまよひより起るものなれば、相手の心変りを責めて引戻すに義理を論じ人情を説くも詮せん方かたなし。むかし思へば見ず知らずとは小唄の文句にもあることなれば、それもこれも皆一ツ時の縁なり。片時たりとも嬉しき夢を見ただけが徳と思はば誰をか怨うらみみ何をか悲しまんや。

僕天性浮氣の身なれば従つて嫉妬しつとの執念薄く、嫉妬の執念薄きほどなれば、いやがるものを無理無体にくどきなびかせんと執着は更になし。さりとして気ぎな咳せき払はらひして据膳すえぜん

ならでは喰ひやせぬといふほどの自惚うぬぼれもなければ、まづ小当りに當つて出来やすきを取
 る。出来やすきを取るが故に捨てるも捨てられるも皆その時の運とあきらめるは年来僕の
 取り来りし道にぞありける。岡目八目おかめはちもくこれを見て頻しきりに檻樓買ぼつかいといひしも一理なきにあら
 ざるべし。檻樓買やすものがいは安物買ぜにの銭失ひをいふ。その意一文惜もんしみの百損に同じといへども、
 これ畢ひつきよう竟やその結果を見ての推論なるべし。人誰か完全を望まざるものあらん。然りと
 いへども小人しょうじんにして珠たまを抱かげば必過かなあやまちあり。鏡に面つらをうつして分を守るは身を全うする
 の道たるを思はば檻樓買や必しも百損といふを得んや。一張羅いちちようらの晴着に空模様ばかり気に
 しては花見の興も薄かるべし。日の暮るるも知らで遊び歩くは不断着の尻端折しりはしよりにしくぞ
 なき。さればや僕少壮の頃吉原よしわらすさき洲崎すさきに遊びても廓かくな内第一ないと噂うわさに高き女を相方あいかたにして
 床の番する愚を学ばず、二、三枚下つたところを買つて気楽にあそぶを得手えてとなしけり。
 肌合面白く床の上手なるものかへつて二、三枚下つた処ところにありしぞかし。然るを世の嫖ひよう
きやく客きやくといふものは大抵土地の評判を目当にして女を選び、新聞の美人投票に当りしものな
 ぞ買ふを名誉とす。これ医者ならば博士は皆名医なりと思ひ、宮内省御用くわいしやうと銘打ちし菓
 子は皆上等と心得て安心する輩やからなり。名義に拘こうてい泥する風習勿論昔よりこれありしといへ
 ども近来に至つてますます甚しきは何ぞや。新橋芸者の品しなさだめ定じやうにもすぐと一流二流の差

別をつけるはまだしも忍ぶべし。文学絵画の品評にまでとかく作家の等級をつけたがるは何たる謬びゆうげん見ぞや。尤もつともかくの如き謬見に捉はるるは田舎出の文士に多し。田舎出の文士に限つて世評を気にかけて売名に汲々として新春年賀の端書はがきにもおのれが著書の目録なんぞを書きつらぬるが癖なり。僕西洋より帰り来りし頃には文壇売名の悪風いまだ今日の如く甚しからざりしが大正四、五年の頃より文壇のみならず世間の風潮全く一変したり。芸者も文士画工と同じく売名に憂身をやつすもの追々に増加し踊三味線のさらひの如きも劇場博覧会その他公開の場所へ持出し新聞紙に芸評を掲げらるるを無上の名誉となすに至れり。この悪風の生ずる処一つには遊芸師匠の教きようぎ唆そによるものにして、師匠は芸者の名を借りて門戸を張らんとし新聞におさらひの評判出るを以て流派の面目と思ひなしたり。烟花えんかき狭斜ようしやの風俗かくの如く新聞紙を利用して売名をのみ専もつぱらとなすに至つては粹すいも意気もあつたものにあらず。粹といひ意気といふ江戸伝来の風儀なくなれば三味線弾は広告屋の楽隊と異なる所なく芸者は簡単なる醜業婦にして、まづは生きたる共同便所ともいふべきものはなるなり。病毒少くして揚あげ代廉だいやすければ醜業婦の能事のうじは畢おわるなり。ここにおいてや明治四十一、二年の頃より大正三、四年の頃まで浅草十二階下、日本橋にほんばし浜町はまちょう蠣殻かきがら町ちよう辺べに白首しろくび夥びただしく巢を喰ひ芸者娼妓これがために顔色なかりき。その頃芸者買の勘定どの位

かど考ふるに、待まち合あ席いせき料りょう一円、芸者祝儀枕金共二円、玉代ぎよくだい一本二十五銭、女中祝儀三拾銭を以て最低とす。新橋にてもこの程度にて遊べるところ路地ろじの小待合こまちあには随分ありたり。神楽坂富士見町四谷辺ならば芸者壹円にて帯を解くものもありしかど名ばかりの芸者にて長襦袢ながじゆばんは胴拔どうぬきのメレンスなり。然るに浜町の白首、俗に高等とよびしもの衣裳容貌山の手の芸者に劣らざるものにして待合席料一円、女並なみ五、六十銭より上じ玉ようだま一円どまりにて別に女中の祝儀は取らず。これ女の揚代より四分を待合が取るゆゑとか聞きぬ。御泊りとなれば芸者は十一時より翌朝まで玉ぎよくだけでも十二本の規則きめなるに、浜町は女二円にて事済みなり。かくの如く浜町のあそびは芸者買の半分にも足らざるほどにしてしかも振られるといふ事なければ流行はやること夥おびたしく、遂に芸者組合より苦情出で内々その筋へ歎願密告せしかば大正五年四月の頃より時の警視総監西久保某といへる人命令を部下の角袖かくそでに伝へてどしどし市中の白首を召捕めしとりけり。以後浜町蠣殻町辺には白首の優物跡ゆうぶつを絶ち、芝神明境内しばしんめいけいだい、柳原郡代屋敷やなぎわらぐんだいやしきなど維新前後よりありし魔窟たちまちも忽ち掃せられしは、そぞろ天保寅年てんぽうとらとじのむかしも思ひ出されたり。その代り山の手の芸者が売淫この時よりいよいよ公然黙許の形となり芸者連名帳にれいれいと枕金の高を書出す勢とはなりけり。まづ僕が多年の実歴を回想して市中色町いろまちの盛衰を語るべし。

四

明治三十年の頃僕 麴町一番町の家に親の脛をかじりゐたり。門を出でて坂を下れば富士見町の妓家軒先に御神燈をぶら下げたり。御神燈とは妓の名を書きたる提灯をいふなり。毎日学校への往かへりに提灯の名を早くも諳じ女同士が格子戸の立ばなしより耳ざとく女の名を聞きおぼえて、これを御神燈の名に照し合すほどに、いつとなく何家の何ちやんはどんな芸者といふ事、一度も遊ばざるに蚤くこれを知る身ぞ賢かりける。

或日、行き馴れし近処の床屋に行きしに僕より五ツ六ツ年上の若い衆。この店の忤なり。今日は親爺が親戚の法事に行きて留守といふを幸頻に新宿ののろけ最中、がらりと店の硝子戸引きあげざま、兄さんといふ嬌声。前なる鏡に映りし姿、年の頃十七、八、つぶしに大きな平打の銀簪、八丈の半纏に紺足袋をはき、霜やけにて少し頬の赤くなりし円顔鼻高からず、襟白粉に唐縮緬の半襟の汚れた塩梅、知らざるものは矢場女とも思ふべけれど、僕は例の御神燈にて駿河家の抱小しまといふ名まで既に知つたるこの土地の芸者なり。小しまは大阪格子を後にしたる上 框へ腰をかけ、散らば

つた『都新聞』の間より真鍮の長羅宇取り上げながら、兄さん、パイレートの絵はたまつたかへ。貰ひに来たんだよ。と泥だらけの駒下駄はきし両足をぶらぶらさせ大きな吠する顔を鏡に映して見てゐる様子かへつてあどけなし。後にて店の若衆にきけば腹ちがひの妹とやら言はれて何ともつかず此方が気まりわるくなり、更に近処の烟草屋で内々にきいて見れば、宇都宮とやら高崎とやらにて半玉に出てあたりしがその後のわけは知らず去年帰つて来てこの土地から出たとの事。二七不動の縁日、三番町や九段下の寄席にても折々顔を見合す中或日突然向よりつこりと、笑顔を向けられて、僕その時は真赤になりしが、翌日はもう我慢がならず、横町の稲荷の隣に何庵とかいふ蕎麦屋の二階より口をかけて小しまを呼べば、すぐに来て、あら、お酒がいらぬのなら、待合さんから呼べばいいのに。つうえいぢやないか。と忝き忠告。富士見町の妓風二十年前既にかくの如く開けたものなり。そも富士見町の妓家待合いつの頃より開け始めしにや。維新以前九段の坂上は馬場なりしといふ。富士見町は武家屋敷のみにして怪し気なる女師匠は麴町三丁目辺町家の間にありしのみなりとぞ。明治十六年醉多道士の著せし『東京妓情』には麴町の名を掲るのみにして明に所在の地を示さず。明治十八年『東京流行細見記』には府下一般芸者之部といふ条に、富士見町の部、小春、小ぎく、小とく、小すず、長吉

の五名を出せるのみ。

僕の初めてこの地に遊びし頃妓家既に二、三十軒を富士見町に算し、十五、六軒を三番町に数へ得たり。待合の富士見町にあるもの菊の家、梅月、寿鶴（後に相模家）、常磐木、寿々村の如き今なほ僕の記憶するところなり。三番町には求友亭の名を記憶するのみにて余は悉く忘却す。料理屋に万源あり。紅葉小波の門人ら折々宴会を催したるところなり。鰻屋の大和田また箱を入れたりしが陸軍の計吏と芸者の無理心中ありしより店を閉したり。今日電車通に繁昌せる魚久は当時魚屋にて仕出しをなせしのみ。三番町表通に大周楼といふ牛肉屋に接して小料理や魚清あり。麴坊派の文士画家一時競つて魚清の娘お清を挑む。その遂に何人の手に落ちしや知らず。お清後に半元服して三番町に待合を営みたるを見たり。その頃また五番町英国公使館裏手の坂道に快々亭とかいふ西洋料理屋ありて、その娘お富が嬌名はこのあたりに広々としたる坂本牧場に鳴く牛の声と共に近隣に聞え渡りしも、今よりして顧れば都の中とは思はれぬのどけさなり。招魂社の馬場の彼方に琉球屋敷あり。筒袖の着物に帯を前で結び、男も長き簪に髪を結ひたる琉球人の日傘手にして逍遙せしさま日もおのづから長き心地せり。韓国もいまだ滅びずしてありしかばその公使館もまた下二番町にありて、この二箇処へ出入りして道ならぬ栄耀をな

す女らを入々皆後うしろゆび指さして、琉球や朝鮮の毒を受けたら最後骨がらみになると言ひはやしき。二七不動に近き路地裏に西京汁粉さいきょうじゅうこなの行燈あんどうかけて、萩はぎの袖垣そでがきに石燈籠いしどうろう置きたる店口ちよつと風雅に見せたる家ありけり。ここに年の頃は二十一、二、色は白けれど引白ひきうすの如き尻付しりつき、背の低く肥りたる姿の見るからにいやらしき娘こそ、琉球人の囀か者こゝものとの噂高くして、束髪に紫縮緬の被布ひふなぞ着て時々げつきん月琴げいこの稽古けいこに行くとは真赤な虚言うそ、その実は琉球屋敷の手すきに錦町にしきちょう辺の高等下宿へもかせぎに行くといふ事なりしが、僕も跡をつけて見たわけではなし。年月たちて明治四十一年の頃、僕友達に案内せられて、浜町二丁目五徳庵といふ鳥料理の近くなる小待合こまちあいに上りし時、上り花持あがばな出る女中をふと見れば、まがふ方なくかの琉球屋敷へ出入の女なりしぞ奇遇なる。浜町の景況この女のはなしにて聞知るところ尠すくなからず。次の如し。

五

明治四十一年、二年の頃、浜町二丁目十三番地俚俗不動新道ふどうしんみちといふあたりに置屋おきやと称へて私娼たくわうを蓄る家十四、五軒にも及びたり。界限かいわいの小待合こまちあいより溝板どぶいたづたひに女中の呼び

に来るを待ち、女ども束髪に黒縮緬くろぢりめんの羽織はおり、また丸髻まるまげに大嶋の小袖といふやうな風俗にて座敷へ行く。その中には身なり人柄、昼中見てもまんざらでもなき者ありし故誰いふとなく高等とは言ひなしたり。あくまで素人らしく見せるが高等の得手えてなれば、女中の仕度して下へ行くまでは座敷の隅に小さくなつて顔も得上げえあず、話しかけても返事さへ気まりわるくて口の中といふ風なり。始め処女の如きはやがて脱兔だつとの終を示す謎とやいふべき。席料その他一切の勘定三円を出ざる事既に述べたり。浜町を抜けて明治座前の竈河岸へつがいがしを渡れば、芳町よしちよう組合の芸者家の間に打交りて私娼わきやの置家おきやまた夥しくありたり。浜町の女と區別してこれを蠣殻町かきがらちようといへり。蠣殻町は浜町に比ぶれば氣風ぐつと下りたりとて、浜町の方にては川向かわむこうの地を卑しむことあたかも新橋芸者の鳥森からすもりを見下すにぞ似たりける。当時東京市中の私窩しかし子を訪ね歩むに、本所立川の入口相生町あいおいちようの埋立地に二階建の家五、六軒ありて夜は公然と御神燈をかがげてチヨイトチヨイトと客を呼びゐたり。中洲真砂座なかすまさざといふ芝居の横手の路地にも銘酒屋楊弓場軒ようきゆうばを並べ、家名小さく書きたる腰こししだけししだけし。高障子の間より通がかりの人を呼び込む光景、柳原の郡代、芝神明、浅草公園奥山おくやま等の盛況に劣らず。山の手にては四谷津の守なる芸者家町の凹地に銘酒屋七、八軒ありしが暫時にして取払ひとなる。下谷池したやいけの端はた、湯嶋天神境内、また京橋築地あたりの小待

合の中には、いづこより連れて来るか知らねど素人を専もつぱらとする家各四、五軒づつはありけり。京橋区役所裏の玉の家といふはこの道にて名高き由。銀座二丁目上方屋といふ花骨はなガル牌タ売る店の前の路地に菊泉とかいふ待合は近処の鳥屋牛肉屋の女中洗湯せんとうのかへりにお客を引込むところとか聞きぬ。青山三聯隊の裏手にて墓地に接したる凹地にも明治四十二年の頃より達磨茶屋でき、また赤坂新町辺芸者家に接したる裏町にも白首しろくびいつとはなく集り住みて人の袖を引きしが、この二箇処いづれも大正五年以後妖婦の跡を絶ちぬ。下谷佐竹ヶ原、根津ねづ、入谷いりや、芝愛宕下しばあたごした、小石川柳町、早稲田鶴巻町辺わせだつるまきちよう、いづれも話には聞きたれど、これらは親しく尋ね究むる暇なかりしものなればここには記さず。およそ明治の末年東京市内にありし私窩子の風俗、名家の文章にその跡を留めたるもの、本郷丸山の風俗の一葉女史が名作『にぎりえ』に描かれたるを以て第一となすべし。『にぎりえ』は明治二十八年の作なり。その一節に曰く、「店先へ腰をかけて駒下駄こまげたのうしろでとんとんと土間を蹴るは二十はたちの上を七つか十か引眉毛ひきまゆげに作り生際はえぎわ、白粉おしろいべつたりとつけて唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅べにも厭らしきものなり。お力りきと呼ばれたるは中肉の背恰せかつこ好うすらりつとして洗ひ髪の大嶋田おおしまだに新わらのさわやかさ、頸えりもと元もとばかりの白粉も榮はなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳ちのあたりまで胸くつろげて、煙草すばすば長煙ながギセ

管に立膝たてひざの無作法ぶさほうさも咎とがめる人のなきこそよけれ。思ひ切つたる大形の浴衣ゆかたに引かけ帯おビは黒縹くろしゆす子こと何やらのまがひ物、緋ひの平ひらぐけが背の処に見えて言はずと知れしこのあたる姉さま風なり。(略)店みせは二間間口の二階造り、軒のきには御神燈ごじんとうさげて盛り塩しお景気よく、空壇あきびんか何か知らず銘酒めいしゆあまた棚の上にならべて帳場ちやうばめきたる処も見ゆ。勝手かっても元もとには七輪しちりんを煽あおぐ音折々に騒さわがしく、女あんな主しが手づから寄せ鍋茶碗なべむし位ことわりはなるも道理、表にかかげし看板を見れば仔細しさいらしく御料理とぞしたためける。云云。「これによつて見るに、襟えりもと二元ばかりの白粉しろこに顔は天然の色白きを誇りたるお力が化粧、今日大正十三年の女子が厚化粧こうけいに比すれば瀟灑しょうせい酒しやの趣おもむき売女うりめとは思はれぬなり。さて明治三十二、三年頃後藤宙外ごとうちゆうがい『松葉かんざし』とかいへる小説に浅草公園楊弓場やうきゆうばのことを描きたり。四十三、四年頃よんじゅうさんにいたりて正宗まさむね白鳥浜町の私窩ひま子こを描き、小栗風葉おぐりふうようは鶴巻町辺の酌しやく婦やくふの事を小説に書きしことあるやうに覚えしが今その名を憶ひ得ず。暫こづく後考こうを俟まつ。およそ明治中葉以降芸者のことを書きたる小説汗あせ牛うし充ちゆう棟とうもただならぬに、地獄白首ぢごくはくしゆうのことを書きたるものに至つては晨星しんせい寥々りやうりやうたるの感あるは何ぞや。芸者の内幕うちまくを穿うがつて書けば通人といはるるに引かへて、白首はくしゆうの事より外ほかには知らぬ人といはれては、文士もいささか気まりがわるくなるものと見えたり。

六

星移れば物換りて人情もまた従つて同じからず。吉原のおいらんを歌舞の菩薩と見て崇めしは江戸時代のむかしなり。芸者を粹なり意気なりと見てよろこびしも早や昨日の夢とやいふべき。明治五年新富町の劇場舞台開きをなせし時、新柳二橋の歌妓両花道に並んで褒詞を述べたる盛況は久しく都人の伝称せし所なりけり。宴席に園遊会に凡そ人の集るところに芸者といふもの来らざれば興を催す事能はざりしは明治年間四十余年を通じての人情なりけり。年改れば新年の宴あり年尽きんとすれば忘年の催あり。知人の旅行することに送別の宴あり。還り来るごとに歓迎の会あり。会開かれて酒出れば必芸者現る。芸者現れてお座付を弾けば、客酔うて必かくし芸をなす。たまたま為さざるものあれば一座挙つてこれを強ゆ。ここにおいて世に出で人に交らんとするものは日頃窃に寄席に赴き葉唄都々一声色なぞを聞覚えて他日この難関に身を処するの用意をなす。あたかも大正の今日西洋料理の宴会に臨むもの、何処でおぼえて来るものやら知らねど、大抵テーブルスピーチとかいふものを心得るゝが如し。往時宴会の隠芸は愚劣なれども滑稽にして

罪はなし。旦那はほんとにいいお声だよ。すみには置けませんよと芸者にほめらるるを生涯の面目とはなせしなり。今日青年諸君の好んで為さるるテーブルスピーチに至つては弁巧と才氣とをこれ見よがしの振舞さてもさても片腹痛し。大勢食事の折柄腹こなしに一席弁じたくば亜米利加人アメリカじんが食卓の祈祷きとうの如きまだしも我慢がなりやすし。風俗時勢の新旧を問はず宴会といふものほど迷惑千万なるはなし。同じく飲む酒も親しき友二、三人と騒がしからぬ旗亭きていに対酌すれば夜廻よまわりの打つ拍子木ひょうしぎにもう火をおとしますと女中が知らせを恨むほどなるに、百疊にも近き大広間に酔客と芸者の立ちつ坐りつする塵煙、燈下に濛々として人の顔さへ見えわかぬが中に、諸君我輩の叫声に耳を掩おほひつつ干物ひものの如き塩焼しかなの肴打眺めて坐する浮世の義理また辛つらしといふべし。幸田露伴先生宴会の愚劣なるを痛罵つうばし宴席の酒を以て鳩毒ちんじくなりと言はれしが世の人の心はまたさまざまなり。小人数で料理屋に上つて芸者を呼ぶよりは、宴会が結局割徳わりとくの安上りと胸算用むなざんようして出席する下賤げすもあり。頗しきりに名刺の交換を迫つて他日人の名を利用して事をなさんとする曲者くせものもあり。火事場泥棒の如きかかる輩やからは芸者を口説くにも容貌や芸などは二の次にして金まはりのよきさうな女にねらひをつけ、年上であらうと何であらうと構はず、此方こちらからちやほやと機嫌を取つて入込むが常なり。新聞社の営業係、小会社の外交員などにはこの類たぐいの曲者多しと

いへり。されば新橋辺にて家持いえもちの芸者は色仕掛のお客と見れば用心なしあまりしげしげ呼ばるる時は芸者の方より体ていよく返礼をなして後の難儀を避くる由よし。そもそも三十年前にあつては応オウライ来芸者と称して通人の眉まゆを顰ひそめたる新橋の妓ぎ、今はかへつて御客の狡こうかつ獪わなるに恐れをなすといふに至つては人心の下落あき呆あきるるの外はなし。

七

言ふべき事とかく岐路わきみちへそれたがるには我ながら閉口なり。さても僕の初めて芸者の帯解く姿を見たりしは既に記せし如く富士見町の寿鶴といふ待合まちあいにして、勘定何もかも一切にて金参円を出でざりし。その頃は半助はんすけといふ言葉も通用しまた壹円のことを大そうらしく武内たけのうちに面会せんなどといふもあり。当時売女の相場、新吉原仲の町角海老なかにちよかどえびの筋すじ向むかひあたりむかひにありし絵草紙屋えぞうしやにて売る活版の細見記を見ても、大見世おおみせの女の揚代金あげだい壹円式拾錢にて、これより以上のはなかりし。以て一般を推すべし。さて僕も富士見町ばかりでは所詮山の手の土臭く井戸の蛙そしりの譏そしりもうしろめたしと思へる折から、神田かんだれんじ連雀町やくちよう 金清楼の宴会にて、講武所駒こま家の抱小みつといへるが水を向けるをこれ幸ひ

と、一人先に金清楼を出で小みつが教ゆる外神田佐久間町河岸の船宿小松家といふに行き土蔵どそうづくりの小座敷に女の来るを待ちたりけり。これは明治三十二、三年のことなり。そのころには自由廃業といふ言葉もまだ耳新しく『二六新報』の記者が吉原の小格子をあらし廻る事をさしていふものとのみ思へる人もありしほどなれば、芸者屋仲間にはまだ全国芸妓組合なぞといふものなく、営業の区域を限る許可地とか称するきまりもなかりしやうなり。芸者その頃冬の夜道に向嶋あたりへ遠出とおいでに行く時、お高祖頭巾こそぎんをかぶるもありき。四角なる縮ちぢめ緬べんの角に糸を輪にして付け、それを耳朶じだにかけてかぶるなり。小袖こそでには糸織縞はおりに意気な柄多くありたり。芸者襟付ふだんぎの不断着ふだんぎに帯かならぎは必引掛ひきかけにして前掛まえかけをしめ、黒縮緬あずま五ツ紋ごすゝもんの羽織はおりを着て素足すあしにて寄席よせなぞへ行きたり。毛織けいしのシヨールシヨール既にすたれて吾妻あずまコト流行はやり。絹ぬいはんけちを三角に一一折ふたつおりとなして頸くびに巻きて口をかくし、金縁薄色の黒眼鏡ピロードをかける。男も同じく絹はんけちに黒眼鏡ピロード、天鷲てんじゆ絨じゆうの鳥打帽とりうちぼう、大嶋おほじまか何かの筒袖つつそでの羽織はおり、着物いちらくは市楽いちらくか風通織ふうつうおりにて、帯は幅広し。小指こさきに金の見留印みとめいんの指環ゆびわ、黒八丈くろはちぢょうの前掛まえかけをしめ、雪駄せったちやらちやらと鳴して歩く。これ色男いろおとこがりたる気障きざりな風なり。芸者が座敷より帰つて来る刻限ときりを計り御神燈ごじんとうの火影ほかげに格子戸こうしどの外より声をかけ、長火鉢ながひばちの向へ坐つて一杯やるを無上の楽しみとす。すべて妓家の模様を書きしるせしもの既に言ひしが

如く汗かんぎゅうじゅうとう牛ぎゅう充ゆう棟とうなればここには除けり。好奇の人左に掲ぐる図書について見玉はば、
 明治年間花柳風俗の変遷おのづから歴然たるものあらん歟か。

柳橋新誌 二卷 明治七年出版成嶋柳北著

柳巷絃妓全盛揃 一卷 松本重清画酔月亭撰

新橋雜記 二卷 明治十一年十一月三十日出版松本万年著

東京新繁昌記 六卷 明治七年四月出版服部誠一著

東京妓情 三卷 明治十六年十月出版醉多道士著

花柳事情 三卷 明治十三年十二月出版醉多道士著

新橋芸妓評判記 初編 明治十四年九月出版中村呉園著

東京粹書 初編 明治十四年五月出版野崎城雄著

銀街小誌 初編 明治十五年二月出版槎盆子著成嶋柳北序

芸娼妓評判記 一卷 明治十八年八月出版粹多道人著

通人必携 一卷 明治十七年四月出版二代目花笠文京著伊東橋塘序

仙洞美人禪 一卷 明治十七年十一月出版三木愛花著

東都仙洞綺話 一卷 明治十五年十二月出版三木愛花著

東都仙洞余譚 一卷 明治十六年八月出版 三木愛花著

東京遊覽記 一卷 明治廿一年十月出版 竹外居士原田真一著

東京流行細見記 明治十八年七月出版

當時全盛絃妓細軒記 明治三庚午版 流行道人著

柳橋芸者名寄 出版年月不詳

全盛北里花魁列伝 第一編第二編 明治十四年十二月出版 桜洲散史大久保常吉著 三木

愛花序

龍山北誌 二卷 明治十二年十二月四日出版 一名花街春史 服部誠一 閱桑野銳 戲著

娼妓節用 一卷 明治十七年出版 三木愛花原作 戲蝶子補綴

新橋八景芸者節用 一卷 明治十七年出版 三木愛花原作 戲蝶子補綴

日本橋浮名歌妓 一卷 明治十七年出版 山田春塘著 伊東橋塘 閱

東京芸妓評判録 初編 明治三十七年出版 著者不詳

よし原 一卷 明治廿四年二月出版 大文字楼 静江序 角海老楼 金龍句 稻本楼 八雲詩 松の

家露八句 其他の題詞あり 年英挿画

太平楽娼妓演説 明治二十四年二月廿四日出版 八幡楼 高尾序 川上鼠文序 烏有山人筆記

娼妓てこ鶴の演説

東都の名妓 大正六年出版川尻清潭岡村柿紅共編

これ僅に僕の経目せしものを挙げしに過ぎざるなり。山田春塘の著『日本橋浮名歌妓』は明治十六年六月檜物町の芸妓叶家歌吉といへるもの中橋の唐物商吉田屋の養子安兵衛なるものと短刀にて情死せし顛末を小説体に書きつづりしものにしてこの情死は明治十三年九月新吉原品川楼の娼妓盛糸と内務省の小吏谷豊栄が情死と相前後して久しく世の語り草とはなれるなり。品川楼盛糸がことは当時『有喜世新聞』に『心中比翼塚』とか題して浄瑠璃風に文飾して書きつづりしものあり。また春亭史彦といふ人のつづりし『北廓花盛紫』と題せし草双紙もあり。これらを採りて明治三十二、三年の頃伊原青々園『都新聞』に続物小説を執筆せしを伊井一座の壮士役者これを芝居に仕組み赤坂溜池演伎座にて興行したり。明治年間にありし情死にして小説戯曲に仕組まれしもの先この二ツ位なるべし。広津柳浪が小説『今戸心中』は京町二丁目中米楼にありしものとか聞きしがその文体力めて実録となる事を避くるが如くなれば例外とすべし。世の噂は七十五日といはるるに心中沙汰のみ世に永く語り伝へらるるはこれ畢竟小説戯曲の力による事近松門左衛門が浄瑠璃の例を引くにも及ぶまじ。明治四十五年の春新橋信楽

新道みちの政中村家政代とよびし芸者、俳優中村又五郎を怨みて硫酸を飲んで死したり。されど小説にかきつづりて世に伝へんとする好事家こうずかもなかりしかば化けて出る噂もほどなく消えてしまひけり。大正の世となりて女優松井おすまの縊死いし、新華族芳川よしかわの娘おかまが出奔しゅっぽん、医者浜田の娘おえいの自殺じせきなんぞ、皆痴情ちじょうのためにその身を亡し親兄弟に歎なげをかけ友達の名を辱めたる事時人じじんの知るところなり。浜田の娘おえいは猫入いらずといふ殺ころ鼠劑つそざいを服して最後を遂げたりしより無分別の若き男女思案に余ることあれば今にこの薬あがなを購かふもの絶えやらずといふ。猫入いらずは即むかしの石見銀山いわみぎんざんなり。明治三年猿若さるわかちよ町うちのおきぬといふ女金貸の旦那をこの毒薬にて殺せし事ありてより、石見銀山の名久しく人の口にいひ伝へられしが世は変りてその名もまたいつか異りたり。往時編笠かぶりて心中の沙汰うたなぞ唄うたひ歩みし読売よみうり今は縁えん日にちの夜の唱歌となるもまた物同じくしてその名のみ同じからざる一例となすべし。書生風したる男のヴァイオリンひきて卑し気なる調子にて物うたふは、これを名づけて何節といふにや知らざれど、その謡うたふところを聞くに賤しき語にて簡単に事の次第を伝へたるものあり。後世の史家かならず必見て以て風俗史の資料となすべし。

ああ悲しやな悲しやな、

恋しき君に先立たれ、
今は語らむ人もなし。

思へば衣裳も手につかず、

幕の下りるを待兼ねて、

忍泣きする舞台裏。

いとも哀れな須磨子嬢。
すまこじょう

恋しき嶋村抱月の、
しまむらほうげつ

お跡をしたふ死出の旅。
しで

こはたまたま僕の記憶に存せる語句を摘記したるに過ぎず。街頭の俗謡といへども固もとより作者の存するあり。当時教科書編纂者のなすが如くだまつて他人の文を盗用するは礼にあらず。故に一言みだりして妄みだりにその断片を採つてここに録する所以ゆえんを述べ。

八

追懷は老耆無上の慰樂となす所なり。明治四十一年秋、僕西洋より归来りし時木曜会の

文人僕のために祝宴を開かんとて、ああでもないかうでもないかと相談の末おもひおもひに姿をやつして上野停車場に集り、それより浅草辺を遊び歩きで一泊することとなしぬ。九月半の事なり。花見時はなみどきにもあらぬ白昼なれば、もし身分職業がら仮装を厭ふ者は会費の外に罰金五円を出してあやまる事になしたり。然るに当日午後の四時を期して上野停車場の待合室に集るものを見れば会長巖谷小波先生いいわやさぎなみを始めとして十四、五人の会員一人として罰金を出すものなくいづれも車夫しやふ、牛乳配達夫、職人、行商人等に身をやつしたり。その中にて小波先生は双子縞ふたごじまの単衣ひとえに怪し気なる夏羽織なつばおり、白足袋雪駄しろたびせつたにて黒眼鏡をかけし体てい、貸座敷の書記さんに見まがひたる。また大田南岳おおたなんがくの山高帽やまたかぼうに木綿の五ツ紋、小倉くらの袴はかまをはきて、胸に赤十字社の徽章きしやうをさげたる。この二人は最上の出来栄できばえなりけり。同勢十四、五人徒歩して浅草公園を一巡し千束町一丁目松葉屋といふ諸国商人宿あきんどやとに入りて夕飯を食し、さておもひおもひに公園の矢場銘酒屋やばをひやかすあり、玉乗り源氏節げんじぶしの踊を見に行くあり吉原小塚原こづかつぼらの女郎屋をぞめき歩くもあり、やがて松葉屋に帰りて一泊す。蒲団ふとんの不潔なるを恐れて外泊するものはまた罰金を取る約束なれば一同帰り来つてここに一夜を明し翌朝朝飯すませし頃折好く表に紅勘べにかんが三味線弾いて来りしを呼上げ祝儀を奮発していろいろの芸をやらせ、宿屋を引き上げて一同竹屋の渡しを渡り、桜のわく

ら葉散りかかる墨堤を歩みて百花園に休み木母寺の植半に至りて酒を酌みつつ句会を催したり。木母寺の植半は旅宿をかねたる酒樓にてその頃は芸者を連れし泊込みの客多かりしが二、三年を出でずして或会社のこれを買ひ取りて倶楽部とやらになせしより木母寺の境内再び紅裙のひらめくを見ず、梅若冢の柳を見ても黄昏一片麤蕪雨と柏如亭が名吟を思ふべき人もなくなりたり。日の暮れんとする午後五時となれば鐘淵紡績会社工場の汽笛人の耳を劈き草木の葉をもふるひ落さんとす。川霧立まよふ頃の夕まぐれ、ここの渡しをいそぎ橋場の岸近くなる時真崎稻荷の森かげをぬひて廓の灯を望み見たりし情景も明治四十一年の頃には既に過ぎし世の語り草なりけり。言問のほども中の植半とて名高き酒樓ありしが大正のはじめには待合風の料理屋となり女夫風呂とか名付けし鏡張りの浴室評判なりしが入浴中に情死を遂げしものありて忽客足絶えほどなく家も取壊しになりしと聞けり。秋葉神社のほとりには有馬温泉とよぶ連込みの茶屋大正五、六年頃までありしやに覚ゆ。向嶋にてこのたぐひの茶屋といへば入金金の繁昌久しきものにして蜆汁の味またいつまでも変らぬこそ目出度けれ。僕大正八年の春築地より雪見に誘はれて立寄りし事ありしが蜆汁の味十年のむかしに変わらず玉子焼も至極暖なりし故床の間に掛けたりし柴田是真が蜆の茶懸も目に残りて今に忘れやらず。秋葉に秋

葉芸者として三みめぐり圍土手下の芸者とは別の組合出来たりしは大正改元の頃にやあらん。帶さへ解かざる手しゅれん練の早業流行せしかば、一時禁止となりしがほどもなく再興して三圍の古き仲間こまに合体せし由。これは大正七、八年の頃なるべきか。およそ大正の世となりて都下に新しく芸者屋町の興りしもの一、二箇処に止まらず。麻布網代町、小石川白山、渋谷しゅが荒木山、亀戸かめいど天神てんじんなんぞいつか古顔となり、根岸御行の松、駒込こまごめ神明町、巢鴨すかも庚申塚、大崎五反田、中野村新井の薬師やくしなぞ、僕今日四十を過ぎての老脚ほとんどにては殆遊歴いしよまに違あらざる次第なり。新開の町村に芸者屋町を許可するは土地繁昌を促すがためといへり。あたかも辺陲へんすい不毛の地に移民を送りて開墾くわだつを企る政策の如し。都下近郊の水田を埋め樹木を乱伐し貸家を建てて町となすに売女を公認して繁華はかを謀るにも及ばざるべきに、当世人がいはゆる発展策と称してよろこぶところのもの大抵この類にあらざるはなし。かへすがへす文学雑誌と売女との増加は慷慨こうがいの土にあらざるも誰かこれを見て寒心せざらんや。ナゾト肩をいからしながら、こつそりと遊びに行く山の手の小待合、賤妓を待つ間の退屈しのぎに筆をチャブ台だいの上に執る。時これ大地震のあくる年春もまだ寒きバラツクの御二階において金阜山きんぷさん人しるす。

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月〜1982（昭和57）年3月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：米田

2010年9月5日作成

2011年4月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桑中喜語

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>